

2021/04/11 公開



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

■ ユダヤ入門シリーズ ■

#18 「十字軍と無千年王国説 歴史を解く鍵はバイブルにあり」

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第18弾！パチパチパチ！さて、前回の動画では十字軍のお話をしました。十字軍は大きいやつ・目ぼしいやつを数えますと7回。ちっこいのを入れたら8回。もっとちっこいのを入れたら10回くらいあるんですけど、まあ7回あったとしましょう。この7回続いた十字軍戦争で成功したのは1回目だけなんです。

1回目の成功で、十字軍はエルサレム王国という国を造りました。しかし、すぐに形勢を整えたイスラム軍に逆襲され、エルサレム王国の領土はどんどん小さくなって行きます。イスラム軍の反撃を受けて領土が小さくなるたび、2回目行け！3回目行け！4回目！5回目！6回目！ずっとやって行くけど、成功したのは1回目だけ。7回終わった段階で自然消滅。

1回目から7回目まで約200年間。勝てない戦争を200年続けるって、ものすごいパワー要りますよ。なぜ失敗続き・敗北続きの戦争を200年間もやめなかったんでしょう？その理由は、実は当時のヨーロッパの人々の終末観にあるということをお話しましたね。今日は、もう少し詳しくこれを見ておきたいと思いました。

ところで、聖書には何が書いてあるのか。ひと言で言うと、罪によって台無しになってしまった人間・自然界・全ての被造世界を再生するための神の一大プロジェクトについて書いてあるのです。

やがて、キリストがクリスチャンたちを迎えに来る時が来ます。この瞬間かもしれません。この瞬間なら、私は今画面からパッと消えるわけですね。世界中からクリスチャンを天に引き上げる。これを**携拳**（けいきょ）と言います。携拳という大事件の後、ヨーロッパから傑出した男性の政治家が出て来ますが、彼はただものではない。反キリストです。

彼はイスラエルと7年有効契約を結ぶんですね。結んだ初日からちょうど7年間、恐るべき時代になります。この7年間は**患難時代**。患難時代は前半の3年半だけで世界人口が半減する。恐るべき時代です。天変地異があります。パンデミックがあります。戦争があります。詳しくは**黙示録**に書いてあるんですね。

患難時代がどのようにして終わるのか。最終日にイエス・キリストが地上再臨すると預言されています。イエス・キリストがエルサレムに来て、神に反逆する軍隊に裁きを下し、決着をつけて患難時代が終わる。その後 **千年王国**が始まるんですね。

千年王国は**黙示録 20章**に出て来ますが至福の時代です。患難時代と正反対。エデンの園の時代の再現のような時代。戦争が一切無い。被造物の全ての世界に祝福が及んでいる。肉食動物と草食動物が肩を並べて昼寝するような時代。こんな素晴らしい千年間の時代が千年王国です。

なぜこの千年間がこんなに平和で安全なのか？ 人類をかどわかして来た 目に見えない霊的存在のサタン（悪魔）が、この千年間は活動できないんです。神が準備した牢獄の中に閉じ込められているので活動できない。人間をそそのかすことができない。なので、この千年間は非常に平和で至福に満ちた時代。

しかし、サタンは千年の終わりにもう 1 度解き放たれるんですね。黙示録 20 章にこう書いてあります。“世界の四方から、諸国の民が軍備を備えてやって来てエルサレムを包囲し、キリストの王国を滅ぼそうとする。その時 天から火が降って来て、最後の反逆の軍隊を滅ぼしてしまう。”

この戦争の後に**最後の審判**が始まるんです。最後の審判で、この世界に生れて来た全ての人たちがよみがえり、一人ひとり神の前に立って審判を受け、自分の行いに応じて裁きを受けます。

“いのちの書とされている書物に名前が無い者はみな 死の池に入る”と書いてあって、これが**第二の死（永遠の裁き）**なんですね。

さて、千年王国に関する情報は**黙示録**の中に出て来ます。十字軍時代のカトリック教会は、黙示録を字義通りに解釈しませんでした。何から何まで“たとえ”として読み込むという神学に立っていたんです。黙示録には象徴や比喻が多い。だから、「出て来る比喻は全部比喩的に解釈していいんだ」と言うけど、黙示録に出て来る比喻は必ず前後に解き明かしがあるし、ない場合には、黙示録以前の旧約聖書の中に、その象徴はどんな意味で使われているのかという前例が大抵あります。その前例に基いて解釈する。“聖書は聖書で解釈する”のが原則です。

だけど、当時のカトリック教会はそのような聖書解釈ではなかった。

“千年王国なんか無い”という解釈に立ったんです。これを“**無千年王国説**”と言います。

「でも、無いと言っても、千年王国のことが書いてあるじゃないか。」「あ、これ比喻なんだ。」

どういう比喻なのか？ 実際に登場する国ではない。イエス・キリストが来て教会ができる。

この教会時代が千年王国なんだ、と解釈するんです。

間もなくキリストが来てから千年が終わろうとしている。千年王国が終わる。

千年王国が終わったら次 何が来ましたか？ 最後の審判ですよ。

だから、十字軍が始まる頃の時代は、今にも終末が始まるのではないかとされていました。

最後の審判の時に誰が天国に行けるのか？ いのちの書に名前が書いてある人だけが行ける。

じゃあ、いのちの書に名前が書いてあるかどうかは、どうやって知ることができるのか？

どうなったら、いのちの書に名前がなくなるのか？

ローマ教皇は、ローマ教皇の発言に対して、信心深い中世の王様たちは誰も逆らうことができなかった。

それだけではありません。実は AD900 年頃から、ヨーロッパでは大事件が起こってたんです。

地の果て・海の果てから、異民族が西ヨーロッパに侵略して来る。これが頻繁に起こり出してたんですね。

まず スカンジナビア半島から北方ゲルマン民族が船に乗ってやって来ました。ヴァイキングですよ。

スカンジナビア半島は地図で見ると海岸線がギザギザしてますよね。フィヨルドと言います。

フィヨルドをヨーロッパの人はヴィークとも呼んでたんですね。

ヴィークから来たからヴィークからの人、ヴァイキング。海賊ですよ。パイレーツ。

北方ゲルマン民族って、めっちゃ体でかいんですよ。そして、船を操る技術に長けている。

そんな海賊軍団が北の海を荒らし回るだけでなく、とうとう西ヨーロッパ大陸に上陸したんです。

上陸だけでなく、フランスの北の海岸地方に住みついて、そこに国を造るんですね。その地方をノルマンディー地方と言います。ノルマンディー上陸作戦ってあったじゃないですか。スカンジナビアから来たヴァイキングはノルマンディー地方に国を造ったので、そこからノルマン人と言われるようになります。

ノルマン人たちはフランスの一部を取るだけでは満足しない。寒い所にいたから、あったかい所に行きたい。もっと大陸に行きたいし、もっと領地を増やしたい。それで、ドーバー海峡を渡ってイングランドに入ります。イングランドには原住民のアングロサクソン族がいたけど、彼らをバツバツとなぎ倒して王様になります。

それだけではない。当時 イタリアの南方の島々やその地方はイスラム軍が押さえていました。ヴァイキングは船を操るのがうまくて、めちゃくちゃ強いですからね、地中海を渡ってイタリアの南に行つてイスラム軍を撃破し、そして島に住みついた。それがシチリア島です。このように、異民族が「おお！」と言っている間に、ヨーロッパ西側をどんどん塗り潰していくんですね。

しかも、海から来る異民族だけじゃないんです。陸からも来たんですね、これがまた。マジャール民族。マジャール人はウラル山脈の東にいたんですが、いつの間にかウラル山脈を超えて、東ヨーロッパを超えて、西ヨーロッパに突っ込め！マジャール人は遊牧民族で、馬を乗りこなすのがうまいんです。だから一旦突破されたら、斬り込んで行くスピードが半端ない。あっという間にヨーロッパにザッと来て、また押し返されて。このマジャール人が造った国がハンガリーなんですね。

いずれにしても、見たこともないような人たちが海からも陸からも来て侵略し、そして、エルサレムは異教徒のイスラム軍に包囲されている。「あっ！これって、カトリック教会が言った終末観の解釈そのまんまじゃない！千年王国の終わりには異教徒や異邦人が軍隊で集まって来て侵略し、エルサレムは包囲されて。」

つまり、今は千年王国の終わりに来ている。千年王国が終わると最後の審判が始まる。最後の審判で天国に行くためには、ローマ教皇に逆らうことはできない…という恐れがあったので従って行ったのです。終末預言の勘違いによって、愚かしい戦争を200年も続けてしまったんですね。

サタン（悪魔）は聖書を誤解させて、間違っただ私的解釈や曲解によって、人類を大きく揺さぶったり滅ぼしたりしようとするんですね。

ところで、十字軍は結局どのように終わって行ったのか。AD900年くらいから異民族がどんどん来て、ちょうどAD1000年になる頃には「千年王国、終わるんちゃうか?!」「もうちょっと待ってみよう、もうちょっと待ってみよう」と続いたけど、1100年になっても最後の審判は起こりませんでした。1200年になっても最後の審判起こりません。1300年になっても。「言うてること、起こってないやん！いったい何なん、今までののは！」

1300年くらいになったら、「ローマ教皇の言う通りにして、出費ばかりかさんで、ダメージが大きくなって、しかも最後の審判なんか、いつまで経っても来えへんじゃないか。」それで十字軍は自然消滅。同時に、ローマ教皇の権威がガターンと地に落ちるんです。ローマ教皇の権威が地に落ちることによって、後のルネッサンスと宗教改革に繋がっていくのです。

ところで、ローマ教皇の権威は確かに地に落ちましたが、教会が振り撒いた反ユダヤ主義・思想はそのまま残ってしまったんですね。十字軍以降、ユダヤ人迫害の理由が、とりとめもないものから宗教的理由に結び付けられて、迫害が始まって行くのです。

すなわち、ユダヤ人はキリスト殺しの民。ユダヤ人は罪深い民族。神の御子であるキリストに反逆するユダヤ人は悪魔の民族。悪魔の民族はいつも悪だくみを企んでいるに違いないんだ。

妄想がどんどん暴走し、ユダヤ民族がまるでモンスターであるかのようなイメージを持ち、ヒートアップするんですね。その偏見と迫害が十字軍から400年続いて行くのですが、その400年間、ユダヤ人はどうやって乗り越えていったんでしょう。

そんなことを、次回の『ごうちゃんねる』でご紹介したいなと思います。

今日も最後まで見てくださってありがとうございました。またこの番組でお目にかかりましょう。それまで皆さん、ごきげんよう。さよなら！

* 使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。